

うらかな春の一日。奈良の盆地を北に向かつて馬を走らせる一行がある。左手には生駒の山並みが柔らかな新緑に包まれている。緩やかに流れる佐保川の葦辺に、鴨が餌をついばんでいる。「おおい。休むぞ。」

後ろから声をかけた少年は、長皇子。速度を落として振り返ったのは、弟の弓削皇子。

「あの山の上で休みましょう。」
弓削は手にした鞭で前方の小山を指し示すと、また馬を走らせる。

小山の麓で足掻いてはやる馬を下りると、駆けつけた帳内に手綱を渡して、さつさと小道を登り始めた。
「元気だなあ、あいつ。」

呆れながらも長は弟の後を追う。おっとりとした長はいつも同い年の弟に先を越される。それでも泰然自若として一向に意に介さないところが、生まれつきの王者の資質とでも言おうか。

春とはいえ、汗ばむ陽気である。鶯が鳴いている。空を見上げると、芽吹いたばかりの青柳の小枝を銜えた鶯が一羽、声のする方へ飛んで行く。長は立ち止まると汗を拭きながら、後から来る佐留を待った。

「大丈夫か、佐留。」
「何の。まだまだ皇子様方には負けませぬ。」

口ほどにもなく息を切らせている。長の側まで来ると、先に行く弓削を見上げて溜息をついた。

「お元気ですなあ。」
「うん。元気だなあ。」
二人は顔を見合せて笑った。

小山の上に古い小さな祠があった。弓削は辺りを見回した。榊はない。松を一枝折ると祠の前に捧げて柏手を打った。若葉は勿論美しい。だが弓削はいつも青々としているこの松の木が好きである。山頂は東側が広く開けて、盆地が一面に見渡せる。

「これが高円山。あれが三笠山。」

佐留が教える。飛鳥の都は霞の向こうに沈んでいる。

弓削の上気した頬がっややかに光っている。凜々しく引き締まった眉毛の左の端だけがいたづらっ子のようにぴんと跳ね上がっている。弓削は空を見上げた。鶯が緩やかに弧を描いている。戦後生まれの少年たちは、身内相手に戦った父母の世代の苦しみを知らない。父は時の浄御原宮大王。母は先代近江宮大王の娘、大江皇女。この生まれながらにして高貴な星を背負った少年の目には、のどかな空のかなたに輝かしい未来が広がって見える。そんな弓削を見守る佐留の顔にも、満ち足りた笑みがこぼれる。四十過ぎであるうか、小柄で細面の整った顔立ち。その涼やかな眉が、見る者の目を引きつける。佐留もまた、弓削の明るい未来に己が未来を重ねて疑わない。

日が翳ってきた。汗ばんだ肌がひんやりとしてくる。

「さあ、そろそろ参りましょう。皆が心配しております。」

佐留が促す。芽吹きの季節である。柔らかな若葉の向こうから淡い日の光が透き通ってくる。

「父上に行ってあげよう。」

今朝、大王は腹の調子が悪いと言って、表へ出て来なかった。弓削はしなやかな腕を伸ばすと、みずみずしい新芽を付けた一枝を手折った。

夏になっても浄御原宮大王の体調ははつきりしない。寝込むことはないのだが、政務に励む姿は見られなくなった。代わって後の菟野が朝政を聴くことが多くなった。宮中の雰囲気は何となく落ち着かなくなっている。佐留にとっても、自分を取り立ててくれた大王の健康は、己の将来を左右する大問題である。佐留は朝な夕なに身を潔め、心を込めて三輪山の神に祈った。

三輪山は飛鳥人の心の拠る所である。昔大汝神は少彦名神と協力して

この国を造った。少彦名が常世の国へ行ってしまった時、替わって大汝を助けたのが大物主の神である。以来、大物主は三輪山に祀られて、飛鳥人の崇拜を受けてきた。朝は三輪山の上に日が昇る。その北をとうとうと流れる穴師川の瀬音と、川上の弓月が嶽に立ち上る雲を従えた三輪山の美しい姿は、まさに神そのものであった。

阿閉もまた、三輪山に昇る太陽に大海人の回復を祈りつつ、心穏やかな日々

を送っている。三人目に生まれた女兒は吉備女王と名づけられた。阿閉の宮殿には、子供達の弾けるような笑い声が、終日絶えることなく続いている。そんな中で、子供達の真面目な草壁が若い大名児に恋をしていることなど、阿閉は知らない。知ったところでどうすることができよう。何人でも妻を持つ時代である。

草壁は大名児に恋歌を贈る。日並皇子尊からの恋歌である。拒むことはできない。

「どこかで聞いたような歌なこと。もう少し面白い歌が詠めないのかしら。」草壁の恋文を広げながら男にしなだれかかる大名児。

「あいつは真面目な優等生だからな。気の利いた歌など望んでは可哀想だ。」男は最初から草壁を馬鹿にしている。馬鹿にしていながら草壁に表向き逆らうことはできない。長年の不満が燻ぶっている。

（大王の位だけで足りなくて、今度は俺から女まで取り上げようというわけか。）

大名児の肩を抱く腕に力が入る。逞しい腕。女の体が芯からうずく。（どうして草壁が大名児を見初めたのか。大名児が俺のものだと知らないのか。それとも何もかも承知の上で俺に喧嘩を売るつもりなのか。）

男の不満を煽り立てようとしている者でもいるのだろうか。大王が病気の今、何やら怪しげな影が忍び寄る気配に、男は気づいていながらそれ以上氣に留めようともしない。

（ええい、ままよ。）

男は大名児を抱き寄せる。剛胆な男である。そこが人気の秘密でもあるが、後先考えぬその行動は弱点でもある。

暮れになって、新しい身分制度が定められた。それによると第一が「真人」。

第二が「朝臣」。第三が「宿祢」。以下「忌寸」「道師」「臣」「連」「稻置」と続く。さらに大王家の親戚筋に当たる十三氏に「真人」が与えられた。

「どうして姓が新しくなったのですか。」

若い弓削にはよくわからない。伯父の川島が教える。

「難波朝以来いろいろのことがあったから、古い姓が現状に合わなくなっているというのが表向きの理由だが、それだけではないな。姓は大王が下さるものだ。氏族どもはより上の姓を貰おうと大王に忠誠を誓うだろう。その分、大王の力は強くなる。」

「では、位階いがいと同じようなものですね。」

「まあ、そんなところだな。位階は人に与えられるが、姓は氏族に与えられるところが違うが。」

「でも、氏族の中には反発する者もいるでしょう。」

弓削が心配する。

「それはいるだろう。だがこれからは反発すれば謀反むほんの罪で罰せられることになる。」

「それが『律』なのですね。」

「そうだ。これまでは『令』つまり規則だけしかなかった。罰則がないから力のあるものは守らない。それで今、唐たらに倣ならって『律』つまり罰則を作っているのだ。『令』を守らないものは『律』で罰せられる。『律』と『令』が揃えば大王の権力は絶大なものに……ん……何だ。」

「うわっ。」

話を続けようとした時、いきなり突き上げるような衝撃を感じた。長は壁際まで吹っ飛んだ。

地震だ。

「きやああ。」

「わあああ。」

あちこちから悲鳴が上がる。床が波ゆがのようにうねって、壁が不気味に鳴る。燭台が倒れ、油が燃え上がる。弓削は羽織っていた毛皮を脱ぐと火を叩き消した。

「外へ出る。早く。」

川島は怒鳴りながら庭に転ころげ下りた。帳内とねりたちが這はうようにして駆け付ける。

弓削は帳内たちを指図して、よろけながら宮殿の内に声をかけて回った。

「火を消せ。庭へ出る。」

宮殿の中から続々と人が転がり出てくる。

「長かったな。」

揺れが収まって辺りを見回すと長が腰を押さえている。

「どうした。」

「腰を打っただけです。たいしたことはありません。」

弓削が戻ってきた。

「長屋が一棟倒れて六七人下敷きになったようです。」

「よし。そなたたちは母上の側を離れるでないぞ。」

川島は素早く身支度すると馬に乗って外へ飛び出した。帳内たちが慌てて後を追う。あたりは豪族の館が立ち並ぶ。堀の内から騒ぎが洩れてくるが、通りにはまだ人影は少ない。後方から蹄あしひの一团が迫ってくる。先頭に立って馬を駆けるのは大伴安麻呂か。負けじと川島も馬に鞭を当てる。大宮に着くと安麻呂はそのまま兵士を指図して宮門を固める。

中は大騒ぎだった。新宮の方は無事だったが、古宮の方は倒れたり傾いたりした建物が多い。大海人と菟野は庭園の竹藪に避難していた。その顔は険しいが、着衣に乱れはない。

一夜明けると都は半ば瓦礫の原のようであった。だが被害に遭ったのは都だけではない。翌日からは各地の早馬が続々とやってきて地方の惨状を伝えた。寺社や役所など主だった建物の被害は挙げればきりが無い。各地で山が崩れ、地が割れ、川が溢れた。伊豆では海面が盛り上がって新しい島ができ、土佐では田畑が海に沈んだ。紀伊温泉は埋もれて湯が出なくなった。

空には不気味なほうき星が現れ、流れ星が降るように落ちた。

「この世の終わりじゃ。」

「何か悪いことが起きねばよいが。」

「これ以上悪いことなどあるものか。」

人々は怯えた。

「佐留、どうして星が落ちるのか。」

佐留が心配して駆けつけると、長は不安げな表情を隠そうともせず尋ねる。佐留にも天文のことはわからない。夜空に降る流れ星の青白い光は、言い知れぬ不安を掻き立てるに十分であった。

その星空を、広い庭の真ん中に突っ立って、独り黙って見上げる男がいる。固太りの丸い顔にくるくるとよく回る大きな目が精悍な光をたたえている。その理知的に輝く両の眼は、星の流れる遠いかなたの暗闇を見つめている。冷たい夜風が高揚した頬を打つ。

（落ちろ。落ちろ。どんどん落ちろ。だが、俺の星は落ちぬ。俺は北辰の星の申し子だ。全ての星が俺の周りにひざまづくのだ。）

他人の凶は己の吉に変えて見せよう。男の後姿が凄まじい精気を放っている。その精気を受けて、池の端にうずくまる石の亀がのそりと動いた。

地震は後が大変である。いつまでも続く余震に怯えながらも死者の弔い、怪我人の手当て、食料の確保、家の修復。せねばならないことは山ほどある。真冬の寒さの中、凍えて死ぬ者も後を絶たなかった。

地震の後のどさくさの中、五十二氏に姓の第二位「朝臣」が与えられた。この日、佐留も「朝臣」を賜った。

「よかつたな、佐留。」

長も弓削も素直に喜んでくれる。

「有り難うございます。皇子様方のおかげでございます。もともと以前の『臣』や『君』が『朝臣』になったのだとは聞いておりますが。」

「それでもないぞ。物部や中臣は『連』だったが『朝臣』になったぞ。」

「大王様が物部や中臣の働きをお認めになったということでございますよ。」

う。」

「しかし、中臣は近江方だ。戦に負けた方だぞ。これでは大伴が黙ってはいまい。」

弓削には何かが起こりそうな予感がする。

「でも、これは大王様がお決めになった事でございます。大伴にもどうすることもできません。」

「それにしても、どうしてこんな地震騒ぎの最中に発表したのだろう。何かを企んでいるやつがいるのではないか。」

佐留も同感である。少年ながら弓削の読みの鋭さに今さらながら感心する佐留であった。

問題はその大伴氏。大伴安麻呂の頭から血の気が引いた。それから、一気に脳天に逆流した。

「ない。」

ないのだ。何度見直しても、大伴の二文字はない。たまたま大宮の庭を通りかかった兄の御行にかみついた。

「これは一体どういうことだ。」

御行は辺りを見回して声を潜める。御行だってびっくりしているのだ。

「以前の『臣』や『君』が『朝臣』になったのだそうだ。」

「物部や中臣は我らと同じ『連』だったではないか。奴等が『朝臣』になって、どうして大伴がなれぬのだ。」

安麻呂の劍幕けんまくに御行はおろするばかり。

「わしは知らぬ。わしは何も聞いてはおらぬのだ。」

「馬鹿なことを言うな。兄者は納言ものちゆうすつつかきではないか。」

「しかし、これは大王がお決めになったことだ。わしにはどうすることもできぬ。」

「ええい。いまいましい。」

安麻呂は大宮を飛び出した。

二人のやり取りを物陰で聞いていた男がいる。小太りで丸顔のその男は、人の良さそうな笑顔を振りまきながらその場を去った。その後姿からは、星の降る夜の漲みなぎるような精気を窺うかがい知ることとはできない。

結局、大伴氏は「宿祢」になった。「宿祢」は昔は時の最高権力者に与えられた称号だが、上位に「真人」「朝臣」が新設されたために、相対的に第三位に落とされている。

「これは何だ。ただのまやかかしではないか。大王は我ら大伴をないがしろになさるおつもりか。」

安麻呂は手にした杯さかずきを床ゆかに叩たたき付けた。杯の割れる音が夜の静寂にこだまする。旅人は一瞬眉をしかめたが、父の怒りはよくわかる。

「なぜ大伴が物部や中臣の風下かざしもに立たねばならぬのだ。」

物部氏が栄光の座にあったのはもはや遠い昔語りとなっている。先の戦い

で、わずかに残った支族が再起を賭けて吉野方についたが、一族を挙げて大功を立てた大伴の比ではない。まして中臣は近江方ではないか。安麻呂には納得できない。叔父の馬來田まぐたや吹負ふけいが生きていればこんなひどいことはなさるまいに。悔しいことに二人とも昨年相次いで亡くなっている。自分の非力が情けない。

「大王は叔父上たちが亡くなるのを待っておられたのか。」

「大王はご病氣うかがと伺うかがっております。これはお后がなさったことでしょう。」

過去にこだわる安麻呂と違って、若い旅人たびとは新しい時代を肌で受け止めてくる。

「もう戦いの時代は終わったということでしょう。倭国はもうないも同然です。白村江で捉えられた倭王が戻ってきたそうですが、既に倭国の民の大部分は、我が大倭国やまと、いや、日本国の配下に入っていますからね。百済も高句麗も滅びました。去年は唐の高宗こうそうも亡くなりましたから、もう唐が攻めて来ることもありませんまい。あいつは百濟方だ、こいつは新羅方しんらだと言って、国内で争うこともなくなるでしょう。これからは武人ぶりのふは必要ないのです。国を治める力が求められているのです。」

武人の必要のない世になるというのが、安麻呂にはよくわからない。

「物部だつて武人ではないか。」

「衰えたとは言え、かつてはこの国の王でした。それに、現在皇祖神すめらみかみとさされている日神はもともと物部の神です。」

「神を祀る者が、武人の上に立つ世になると言うのか。それで中臣が『朝臣』か。」

「神を祀る者だけではありません。四年前には新しい律令を作るみことのり詔みことが出されました。そのためには律令くわに詳しい文官が必要です。それに今は新しい史書も作られています。大王家を中心にした新しい秩序を作るためのものだと思います。この仕事には我国ばかりではなく大陸や半島の歴史に詳しい文官も必要です。この仕事に我が大伴からは誰も加わっておりません。我らに不利にならねば良いかと案じておりました。」

安麻呂の顔色が変わった。

「あ。あれか。平群子首へぐりのこびとと中臣大嶋なかつひが書いているという。」

武をもって仕えてきた大伴氏は、とかく文の道を軽んじてきた。安麻呂も跡継ぎの旅人が武芸よりも文を好むのを苦々にくがしい思いで眺めてきたのである。その旅人の一言で安麻呂は頭を殴りつけられる思いがした。だが、先の見えぬ不安を抱きながらも、自分から事態の打開に動くことができるほど器用な男ではない。

「いくらなんでも、大王が大伴を見捨てられるわけがあるまい。」
壬申の乱の時、大海人の側にいた兄の御行は、今でも大海人のお気に入りのはずだ。安麻呂は祈るような思いで天を仰いだ。

大海人の体調の悪化に従って、次代を担う体制作りが着々と進められている。年が明けると、新しい位階が与えられた。安麻呂は直広三。以前の小錦中から横滑りしただけである。物部麻呂は大昇進して安麻呂に並んだ。三年前に大抜擢された中臣大嶋は一階級下の直大四に迫った。

壬申の乱の敗者である中臣氏と物部麻呂の台頭は、やはり世間の注目を集めた。

「中臣と物部麻呂を推したのはお后だそうだ。」

「やはりな。何と言ってもお后は近江宮大王の娘だからな。」

「物部麻呂は最後まで大友皇子に従った近江朝の忠臣ではなかったのか。」

「いや、そうではない。あれは裏切り者だ。自分の命と引き換えに、自ら大友皇子の首を差し出したというではないか。」

「それは違うらしいぞ。もともと、お後の命令だったそうだ。」

「中臣大嶋は、斬罪になった近江朝の右大臣中臣金の甥だろう。金の子供達はみな流罪になっているはずだ。大嶋一人だけが出世してよいのか。」

「それよ。どうして大嶋が大事にされるのか、どうも、わからぬ。」

「律令だよ、律令。」

「律令って何だ。」

「唐の新しい神様だそうだ。」

「唐の神様と大嶋がどう関係あるのだ。」

「大嶋が律令様をお祀りしているのではないか。」

律令体制のもたらす意味を理解している者は、ほんの一握りに過ぎない。

大海人の病状は日に日に重くなっていく。菟野は病床の横に薬師如来を祀って病氣平癒を祈る。祈りながらも無心ではいられない。菟野は父近江宮大王崩御の時の倭 大后の歌を思い出している。

「言霊の幸ふ国」である。父大王が病の床にあった時、倭媛は大王の長寿を寿ぐ歌を詠んでいる。

天の原振り放け見れば

大王の御寿は長く天足らしたり

(147)

倭媛の寿歌にもかかわらず、大王は危篤に陥り、ついに魂が体を離れた。倭

媛は領布を振って魂を呼び止めようとする。

青旗の木幡の上を通うとは

目には見れども直に逢はぬかも (148)

媛の祈りもむなしく大王の魂は二度とその体に戻ることはなかった。

人はよし思ひ止むとも

玉鬘影に見えつつ忘らえぬかも (149)

「たいした役者だ。」

吉野の山で倭媛の歌を伝え聞いた時、菟野は舌を巻いた。これが倭媛の真情とはとても思えない。父大王は倭媛の父古人大兄皇子以下一族ごとく皆殺しにした。ただ独り残された倭媛を後に立てはしたものの、あくまでも形ばかりの後である。倭媛は生涯子を産むことはなかった。二人の間に愛情がなかったことは容易に察しがつく。

父大王は菟野の母をも愛してはいなかった。政略結婚の相手は大事にはされたが、それと愛情とは別である。大海人から奪い取った額田王ですら心から愛していたとは思えない。人を愛するには余りにも冷めた男だった。父の置かれた厳しい政治状況が、この頃の菟野にはようやくわかるようになってきた。

「夫が亡くなる時、私は倭媛のように涙を流すことができるだろうか。」

菟野もまた愛のない政略結婚の犠牲者であった。

招魂の祈りが効いたのか、大王の病状はいったん回復に向かったかのようにも見えた。が、それも一時。冷たい雨が降り続き山のみじが色づき始める頃、やがて帰らぬ人となった。この後、大内陵に葬るまでの約三年の間、殯宮の前で、亡き大王の徳をたたえて、泣き、語り、舞う儀式が続く。この一連の儀式の場で、それぞれの氏族が先祖代々王家に仕えてきた歴史を語り、今後の忠誠を誓うことになる。

菟野には泣いている暇などない。とりあえず朝政はそのまま菟野が聴いた。人々の関心は次の大王に移っている。日継は一応草壁ということになっているが、体の弱い草壁に大王が務まるだろうか。亡き大王に似た大津の即位を望むものも少なくはない。期待と不安の中で、時代は明らかに移り変わるうとしていた。